

そうだ、おもしろいへ 行こう！
岡山県図書館協会 60周年記念 協賛事業

平成二十三年度 池田家文庫絵図展

江戸時代の 巨大手描き絵図 国絵図復元！



平成 23 年度 池田家文庫絵図展

江戸時代の 巨大手描き絵図 国絵図復元！

会	期	2011 年 10 月 22 日（土）～ 11 月 6 日（日）
場	場	岡山市デジタルミュージアム 5 階展示室
主	催	岡山大学附属図書館 岡山市デジタルミュージアム
後	援	岡山県教育委員会 岡山市教育委員会 山陽新聞社 岡山日日新聞新社 中国新聞備後本社 朝日新聞岡山総局 読売新聞岡山支局 毎日新聞岡山支局 産経新聞岡山支局 日本経済新聞社岡山支局 NHK岡山放送局 RSK山陽放送 OHK 岡山放送 TSCテレビせとうち KSB瀬戸内海放送 RNC西日本放送

ごあいさつ

今年度も岡山大学附属図書館と岡山市デジタルミュージアムは共同で企画展 池田家文庫絵図展「江戸時代の巨大手描き絵図 - 国絵図復元！」を開催することができました。本展覧会は岡山大学と岡山市の文化事業協力協定に基づいた事業であり、本年度で7回目の開催となります。

この展覧会は、岡山大学附属図書館の所蔵する、江戸時代の備前岡山藩池田家の藩政資料である池田家文庫を、広く地域社会の皆様に公開し、親しんでもらおうという趣旨で企画するものです。中でも池田家文庫の特徴のひとつである地図資料、「絵図」を中心に展示をしています。

江戸幕府は、全国の大名に命じて、それぞれの国の絵図を何度か作成させていますが、池田家文庫の中の「元禄備前国絵図」はそのひとつです。池田家文庫の至宝ともいえる、この巨大な「元禄備前国絵図」を復元しようという試みが2010年に行われました。現代の研究者、技術者達がこの江戸時代の絵図を復元する過程で、これまで判明していなかった江戸時代の技術や絵図を作る際の考え方などがわかってきました。今回の展覧会では、こうした成果についても東京大学史料編纂所、東京芸術大学文化財保存学保存修復日本画研究室のご助力を得てご紹介し、またこれまで巨大すぎて公開されたことのない「元禄備前国絵図」についても展示することもできました。

この池田家文庫絵図展で、皆様が岡山、ひいては日本の歴史に興味や関心を抱いていただき、池田家文庫を地域の共有の財産だと感じていただければ、大変嬉しく存じます。

2011年10月22日

岡山大学附属図書館
館長 神崎 浩

岡山市デジタルミュージアム
館長 森 隆 恭

凡例

- 1 本図録は、岡山大学附属図書館と岡山市デジタルミュージアムが2011年10月22日（土）から11月6日（日）まで開催する『企画展 池田家文庫絵図展「江戸時代の巨大手描き絵図 - 国絵図復元！」』の図録である。
- 2 展示番号と本書の図版番号、展示資料目録に付した番号は一致する。また表記は図版番号、資料名、池田家文庫整理番号、員数、年代、法量（cm）の順に記した。
- 3 本書に掲載した展示資料の写真は、岡山大学附属図書館が所蔵する絵図デジタル画像及び岡山市デジタルミュージアムが撮影した画像である。
- 4 本書の総説・展示資料解説は、岡山大学大学院 教授 倉地克直が執筆した。編集は岡山大学附属図書館と岡山市デジタルミュージアムで行った。

関連行事

オープニングトーク

日時 2011年10月22日（土）
午前10時～午前10時30分
場所 岡山市デジタルミュージアム 5階展示室
講師 岡山大学大学院 教授 倉地 克直

記念講演会及びパネルディスカッション

主催 岡山大学附属図書館
岡山市デジタルミュージアム
共催 2009～2011年度科学研究費補助金基盤研究（A）「「地図史料学の構築」の新展開 - 科学的調査・復元研究・データベース -」（研究代表者 東京大学史料編纂所・杉本史子）
日時 2011年10月23日（日）
午後1時30分～午後4時10分
場所 岡山市デジタルミュージアム 4階講義室

記念講演会「国絵図復元の成果」

午後1時30分～午後2時35分
講師 東京芸術大学大学院
准教授 荒井 経

休憩 午後2時35分～午後2時45分

パネルディスカッション「国絵図復活」

午後2時45分～午後4時00分

パネラー 東京大学史料編纂所

教授 杉本 史子

東京芸術大学大学院

准教授 荒井 経

電気通信大学

准教授 佐藤 賢一

筑波大学大学院

博士前期課程 中村 裕美子

国絵図研究会

会員 青木 充子

司会

東京大学大学院

准教授 中村 雄祐

目次

総論

元禄国絵図の世界―「国絵図復元」によせて―	1
岡山大学大学院 教授 倉地克直	
デジタル社会における復元制作の意義―共同研究のねらい―	3
東京大学史料編纂所 教授 杉本史子	
国絵図の復元に挑戦	5
東京芸術大学大学院 准教授 荒井 経	
国絵図復元の現場から	7
東京芸術大学大学院 教育研究助手 平論一郎	
国絵図の復元書写について	10
筑波大学大学院人間総合科学研究科博士前期課程 中村裕美子	

出展資料解説

第一部 国絵図復元にむけて	11
第二部 元禄国絵図の世界	19

出展資料目録	33
--------	----

池田家文庫絵図展記録	34
------------	----

げんろくくにえず 元禄国絵図の世界 —「国絵図復元」によせて—

岡山大学大学院 教授 倉地 克直

地図の時代

たぶん、江戸時代の日本は世界史的にみても地図の最も豊富な時代といえるだろう。世界図・日本図にはじまり、当時の行政区画である国・郡・村ごとの地図が各地で作られた。江戸・京都・大坂・長崎をはじめ各地の城下町や門前町などを描いた都市図も多く作られている。新田開発や検地などのために作られた土地利用図、用水や堤などの普請図、陸上・水上の交通に関わる街道図・航路図などもある。これらは手書きである場合が多いが、江戸時代には木版や銅版による刊行図も盛んに作られ、普及した。

こうした多種多様な地図のなかでも、江戸時代を特徴付けているのは手書きの大型絵図であり、その代表が徳川幕府の命によって作製された「国絵図」である。国絵図は一辺が数メートルにおよぶ巨大な地図で、美術品と呼んでもよいような極彩色の華やかなものである。

国絵図

ここでいう「国」「郡」とは、備前国とか御野郡とかいう律令制にもとづく行政区画のことで、時により若干の変更はあったが、日本列島に60数か国が設けられており、1国は10前後の郡に分かれていた。この国郡を単位とした地図の制作が最初に行われたのは奈良時代の天平10年(738)のことであり、ついで延暦15年(796)にも国郡図の改訂が行われたという。こうした国郡図の制作は、中国の制度にならったもので、国土の統治権を象徴するものであった。ただし、古代の国郡図は全く残存していない。

その後は国郡図の制作が行われることはなかったが、約800年後に天下統一を果たした豊臣秀吉が全国の「郡図絵」の作製を命じている。ただし、この事業は秀吉の死によって完成しなかったものと思われる。

ついで江戸時代になると、徳川幕府によって慶長期(1605年頃)・寛永期(1630年代)・正保

期(1644年)・元禄期(1697年)・天保期(1835年)の5回の国絵図制作が行われた。とくに正保期以降は、縮尺など作製基準が幕府によって統一され、各国ごとに絵図元に指名された大名を中心に作製が行われた。岡山藩も備前国を主に国絵図制作に関わったので、池田家文庫には多くの絵図や関連資料が残されることになった。

元禄の備前国絵図

今回復元が行われたのは、元禄の備前国絵図である。この絵図は、正保の国絵図をもとにその後の変化を踏まえて改訂するように命じられたもので、元禄10年(1697)閏2月に国ごとの絵図元の指名が幕府によって行われた。

ついで4月には改訂の基準となる「覚」(7か条)が示された。その項目は次のとおりである。

- (1) 正保の国絵図を借し渡す。
- (2) 新絵図は、古絵図の通りに仕立てること。古来の川筋が替わったところや、新川・新道・新村・新池・新沼などは描き加えること。
- (3) 地形に変化があるかどうかを所の領主に尋ね、変わった場所があれば絵図を取って、本絵図を直すこと。
- (4) 正保以降に国境や郡境について争論があり、裁許が済んだところでは、所の領主に尋ねてその通りに本絵図を改めること。
- (5) 現在係争中の国境・郡境については、公儀の裁許を受けたうえで、その結果を本絵図に描き込むこと。
- (6) 境筋以外の紛争については、裁許に構いなく絵図を仕立てること。
- (7) 隣国の絵図元と申し合わせ、絵図のうえで国境を確認し、古絵図に相違があれば幕府に申し出ること。

以上である。正保期以降、各地で新田開発などが進み、地形や境筋に変化が起っていた。その変化をとらえることが改訂の目的であったことが分かる。特に国境・郡境については、現在係争中の紛争も解決したうえで、その結果を描き込むことなどを指示している点が注目される。これを受けて全国で100件をこえる境争論が提起され、その解決を待つて国絵図の提出が行われたという。岡山藩でも、石島をめぐる讃岐国との国境争

論を再提訴し、その裁許にもとづいて訂正した新絵図を提出している。

絵図の仕立て方

5月には「国絵図仕立様之覚」(10か条)が渡され、具体的な作り方が次のように示された。

- (1) 絵図の本紙には「越前生漉間似合上々紙」、裏打には厚い「美濃紙」を使うこと。
- (2) 道筋は1里6寸の縮尺(2万1600分の1)で、1里ごとに墨で星を付けること。
- (3) 郡墨筋ぐんすみすじの内に郡名を記すこと。
- (4) 郡を色分けし、郡境は墨筋をはっきり引くこと。
- (5) 村形むらだかの内に村高を記し、高は石切り、それ以下は何石余と記すこと。
- (6) 畠紙らいしに郡色分けの目録、郡ごとの石高、一国の高の合計を記すこと。
- (7) 畠紙らいしに郡ごとの村数、および一国の村数を記すこと。
- (8) 国・郡それぞれの村高を帳面に仕立てて一緒に提出すること。
- (9) 畠紙らいしに絵図元の大名の名前、年号、日付を記すこと。
- (10) 国内の領主名、領地高などは記す必要はない。古絵図にある寺社・宮地などの形はそのまま描くこと。

これと同時に「国境絵図仕様之覚」(2か条)も渡され、国境の描き方についてさらに細かな注意がされた。

- (1) 国境の近くにある寺院・堂社・川筋・道筋・池沼、その他なんでも所の名前が記してあるところは、両国からは書き出さないようにすること。
- (2) 小島なども両国から書き出さないように。ただし、境目の中にあたる場所は両国から書き載せること。

これらのことについては、隣国の絵図元とよく話し合っ一方からのみ書き上げるよう指示された。

なお、絵図元では清書図せいしよずを2部幕府に提出し、手元には控図を置いた。江戸の幕府絵図小屋で、幕府御抱えの絵師に清書図の作製を依頼する国もあった。ただし、現在では清書図の大部分が失われてしまっている。岡山藩では控図を2部作製し、それが現在も池田家文庫に伝来している。また備

中国絵図は、絵図元が備中松山藩安藤氏で、足守藩木下氏がそれを補助した。岡山藩は備中国にも支藩を含めて多くの領地を持っていたため、池田家文庫にも備中国絵図の写図が伝えられている。

国境縁絵図くにざかいへりえず

国境筋を確認するためには、隣り合う国同士で国境縁絵図を作製し、双方がそれを持ち寄って国境の確認を行った。縁絵図は、国絵図のうち国境筋の周辺部分だけを描いたもので、正式には境筋に沿って切り抜いた切合絵図きりあいえずに仕立て、それを双方から付き合わせて、境筋の山並み・道路・川筋・海岸などが一致するかどうか照合した。一致しない場合は双方の役人が協議して、修正した。確認が済むと、縁絵図に隣国の絵図役人が署名・押印し、幕府に提出された。縁絵図の場合も、控図や写図が国元に残されるのが一般的だが、池田家文庫にはなぜか縁絵図に関わる図面は伝えられていない。

元禄国絵図の活用

国元の控図は、岡山城本丸の大納戸おおなんどやぐら櫓に保管され、必要に応じて利用された。その例を2つ紹介する。

1つは、藩主の交替にともなって幕府から派遣される監使(国目付)が来訪したときに、資料として参観に供したこと。具体的には、継政つぐまさが相続した正徳4年(1714)と、治政はるまさが相続した明和2年(1765)の場合が知られる。いずれも元禄の備前国絵図の約60%の縮図が作製されている。これらは江戸時代に作られた複製図といってもよいものである。

もう1つは、児島湾の新田開発をめぐる国境争論の証拠資料として幕府に提出されたこと。国境争論は、寛延・宝暦年間(1748～64)に早島・妹尾などの備中方百姓と備前児島方百姓との間で争われたもので、児島方百姓を後押しする岡山藩役人が、国絵図の写図を幕府評定役のもとに提出した。裁許では、この国絵図が決め手の一つになって備前方に有利な判決がくだされた。その後も両者の間では、児島湾での用益権をめぐる紛争が続くが、そのつど国絵図が参照されている。そのため、関係する村役人の手元にも、国絵図や国境縁絵図の写図が保管されるようになった。

【参考文献】

川村博忠『国絵図』吉川弘文館1990年

杉本史子『領域支配の展開と近世』山川出版社1999年

デジタル社会における復元制作の意義—共同研究のねらい

東京大学史料編纂所 教授 杉本 史子

はじめに

今回公開する国絵図の復元制作は「『地図史料学の構築』の新展開」という共同研究の一環として実施されたものである。この共同研究は、岡山大学池田家文庫のような大名家の史料や、村役人を勤めた家々に保管されてきた歴史史料のなかに豊富に残されている江戸時代の地図類からどのように当時の社会を描き出すか、という問題関心から、いろいろな分野の専門家が協力し合って共同研究を行ってきた。そのなかで、なぜ私たちが、できるかぎり当時の材料・手法による復元制作をしようとしたのか、ということについてご説明したい。

デジタル社会としての現代社会と復元制作

今、私たちの身の回りはデジタル情報に溢れている。各地の大学・博物館や図書館でも、所蔵する絵図の画像のインターネット公開をすることが爆発的に増加している。その中には、肉眼では確認しにくい、細部の詳細画像を公開する例もある。今や自宅に居ながらにして、かなりの数の各所蔵館の持つ貴重な絵図の画像をみることができている時代になっている。かつての苦勞—各地の所蔵館に足を運び、必ずしも絵図閲覧向きには作られていない図書閲覧室の中で絵図を開き観察するという—から解放されつつあるといえる。文化財保存の観点からも、劣化することないデジタル画像を作成し、文化財の経年変化や不慮の事故による損傷や滅失に備えることの意味は大きい。

このような複製自在なデジタル情報全盛の時代に、あえて江戸時代と同じ材料・技法を使い、ある絵図と同じモノを人力で制作する意味はなにか。一言でいうと、それは、そのモノを作った当時の人々の<考え方を理解したい>という動機に基づいている。デジタル画像で絵図というモノを撮影して得られるものは、そのモノの表面の視角情報を数値化したものであり、そのモノ全体の、限られた一面でしかない。あるひとつのモノ全体の質量、質感、人間が作り上げ扱うときの状況、

そうしたものはそこからは抜け落ちてしまう。そのような人間とモノの具体的な関わり方を明らかにするために、私たちは、復元研究を行った。

復元制作とは、モノと人間（肉体をもった）の関わり方を実験的に問い直そうとするものだといえる。

内容とモノとしての特質とが結び合っ、ひとつの絵図表現を作り上げている

たとえば絵図を手にとったとき、それが当時の人々にとってどのような意味をもっていたかを理解するためには、その表現内容を分析するばかりではなく、それがどのようなモノとして作られたかを観察・考察することが不可欠である。表現内容と物質性の両面をともに注目しなければならない理由は、大きくふたつあげることができる。

<1>ひとつは、表現内容・技法が、その表現を作り上げるための材料を入手する条件、選びとられた材料の特性、それによって決定された作成技法・技術の特質によって規定されるということである。

造形物としての絵図の主要な材料は、紙と絵の具。このうち紙は、近世以前から日本列島各地での生産が進んでいた（ただし、竹紙のように、中国の生産に頼っていた紙も依然として存在していた）。一方絵の具は、主要には鉱物や動植物由来のものが使用されており、列島外からの輸入に頼っているものが多かった。

<2>もうひとつは、個々のモノにたいする意味づけが、時代や文化によって異なるということである。目の前にある絵図は、どのような材料入手が可能な条件下で、どのようなランクの造形物として作成されたのだろうか。人々は、どのような材料を選びとり、どのような仕様でそれを作成したのだろうか。すべての人々を平等だと捉える今日とは異なり、江戸時代は、身分によって社会が編成されており、誰のための造形物かによって、作り出される造形物も固有の材料・仕様を持たされていた。モノとしての姿・かたちは、個々の絵図の、社会の中に占めていた位置と無関係ではありえない。いわば、モノにも身分があったのである。

復元対象としての国絵図

現代の日本社会とは異なり、江戸時代には、も

もちろんデジタル画像の地図はなく、地図はもっぱら紙にかかれたモノとして制作されていた。それらは、こんにちの地図に比べると、ずっと絵画表現に近く、説明的な絵を意味する「絵図」という言葉で、呼ばれていた。絵図とは、こんにちとは違い、必ずしも土地空間の説明図に限定されない、事物についての説明図も含んだ、広い意味をもった言葉であった。

そのような江戸時代に、現在でも存在しないような、巨大な紙の絵図が作られた。伝統的な行政区画である国を表現した、巨大な手書き絵図—国絵図である。将軍から制作命令をうけた全国の大名家たちは、競って、高級な紙を何十枚もつぎあわせてつくった一辺数メートルという巨大画面のうえに、自分の領地のある国を描きだした。国絵図とは、いわば、将軍にみせるための、国の肖像画であった。このような権力構造を表現した国絵図は、前掲<2>の、モノとしての絵図の身分体系を検討する格好の素材といえる。

国絵図のような、巨大な画面、そして豊かな色彩を駆使してえがかれた絵図は、中世にはなかった。国絵図は当時のひとびとに、驚きをもって受けとられたことだろう。人々はどのようにしてこれらの絵図を作り上げたのだろうか？ 前述<1>を明らかにする過程は、その制作を追体験することによって、制作の過程でどのような困難な局面やアクシデントがおりうるのかを、発見する過程でもあった。そのような局面やアクシデントによって絵図の表現はどのような特徴をもつことになるのか、私たちが知りたいのはこの点だった。

原本調査と復元制作、その成果

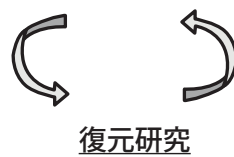
復元制作の前提として、私たちは、現存する江戸時代に作られた国絵図についての詳細な調査を行ってきた。現存絵図が、「いったいどういうモノだったのか」と言う点を、作成技術者（日本画、装丁・経師）、美術史・科学史・歴史・地理・文化資源学などさまざまな分野の専門家が参加し、下記のふたつの方法による、材料・技法・描内容について調査してきた。

- ①科学的色素分析（蛍光エックス線調査、可視反射光スペクトル調査）を初めて地図調査に導入し、顔料・染料を分析

②徹底した肉眼調査

原本調査などで得られた知見を復元研究で検証し、また、原本調査にバックする。こうして得られた知識を、絵図についての初めての総合的入門書に盛り込むことで、広く社会一般の人々に研究の成果を還元する。これが私たちの戦略であった。今回の復元図をめぐる展示・講演・パネルディスカッションによって、その経過と成果を皆様にお伝えできればと考えている。

原本調査・文献調査



『絵図学入門』（杉本他編、東京大学出版会、2011）

⇒ 分野を超えた、
知のプラットフォーム作り



▲元禄備前国絵図の紙質・紙厚調査風景（復元絵図に使用する紙を選ぶためのサンプルとの比較作業風景 2009年8月）

- (1) 2009～2011年度科学研究費補助金基盤研究（A）「『地図史料学の構築』の新展開—科学的調査・復元研究・データベース—」（研究代表者 東京大学史料編纂所・杉本史子 課題番号：21242018）

国絵図の復元に挑戦

東京芸術大学大学院 准教授 荒井 経

国絵図との出会い

2008年1月、私は岡山大学の図書館ではじめて国絵図の調査に参加した。文化財保存学の教員という仕事柄、古いものに接する機会が多いのだが、国絵図の第一印象は古さよりも、その大きさであった。どうやってこの巨大な絵図を作ったのか？日本画の実技を専門とする私の関心は、絵図の内容よりも制作技術にあった。

最初は途方もなく眺めていた巨大絵図であったが、何度も熟覧調査を重ねるうちに、実は私が専門とする近世絵画とほとんど同じ材料によって作られていること、一つ一つの技術も絵画の基本的な技術に通じるものであることに気付きはじめた。「もしかすると作れるかもしれない」という誘惑に駆られ、国絵図の復元計画を申し出たのである。

復元にむけて

2009年の春、科学研究費補助金⁽¹⁾の採択を受け、本当に国絵図の復元を実施することになった。復元には所蔵先の理解が第一である。対象図にはいくつかの候補が挙がったが、復元に必要な調査が十分にできること、そして完成した復元図を幅広く活用できることなどが検討され、岡山大学附属図書館にご協力を賜ることとなり、同館池田家文庫所蔵の《元禄備前国絵図 T1-20-1》を復元させていただくことになった。国絵図の中では比較的小さめとはいえ、316.0cm×357.0cm(8畳弱)もある。

私が勤務する東京芸術大学大学院の保存修復日本画研究室は、古典絵画の模写や修理を基礎として復元制作も日常的におこなっている。しかし、今回の復元はいつもの復元とは違うところがあった。まず、国絵図という絵画以外の復元であること。国絵図は、美術品ではなく歴史資料として扱われているため、美術を専門とする東京芸術大学には馴染みが薄い。復元に際しても歴史学をはじめとする異分野の研究者と連携協力することが必

要だった。また、精密な復元図を完成させることよりも、制作工程の再現を試みて検証することに主眼があったことである。美術の分野では、完成した作品の質が問われることはあっても、作業工程が問われることは少ないのである。復元への第一歩は、美術を専門とする東京芸術大学のスタッフにそれらを理解してもらうことからスタートした。

復元制作

復元制作は、2009年度に計画を練り上げ、2010年の春夏に用具の調達や下準備をおこない、本格的な作業は2010年9月に集中して実施した。場所は東京・上野公園の東京芸術大学の保存修復日本画研究室で、復元スタッフの中心は研究室の若手教員と大学院生たちである。

私の研究室では、古典絵画の描画技法ばかりでなく、掛軸や屏風を仕立てる^{そうこう}装潢技術も習得するので、国絵図の制作に必要な紙拵え(描くための紙を準備する)の技術と墨や絵具を使って描く技術の両方をもっていると思って一定の見通しを立てていた。ところが、実際に準備を始めてみると、国絵図には文字という重要な要素があったのである。東京芸術大学に書の専門はない。そこで、書の専門分野を持つ筑波大学に応援を依頼することになった。

復元作業は、装潢、描画、書記の3つの専門チームが入れ替わりながら進行した。江戸時代の国絵図制作でもこのような連携がおこなわれていただろうという想像に実感がともなった。装潢や描画の作業は基本的な技術の積み重ねだったが、一つ一つの作業に8畳近い巨大さが立ちほだかった。36枚の和紙をつないだ大画面は水分で激しく伸縮するため、裏打ち作業は難航をきわめた。また、もっとも長い日数を要したのは山や樹木を細密な点描で描く作業で、技術よりもはるかに忍耐力が求められた。なぜこんなに手間のかかる点描が使われているのかは、復元を終えた今でも大いなる疑問である。最後に登場するのが、文字を書き入れる書記チームである。すでに絵具で彩られた絵図に真っ黒な墨で文字が書き込まれていく。文字が入ることによって、絵図の格調が高まっていくのを感じた。これも異分野融合ならではの新鮮な経験であった。

復元作業の公開と復元図の活用

こうした作業のすべては、インターネットのブログ（作業日誌）⁽²⁾に毎日写真入りで掲載し、現場に立ち会えない全国の研究者や一般の方々が自由に見られるようにした。ブログの利用は、復元の目的である制作工程の検証をおこなうための工夫であったが、ブログに書き込まれた応援のメッセージは疲労したスタッフの励みにもなった。

復元図は2010年10月に完成した。すでに制作現場となった東京芸術大学と研究母体である東京大学において公開されており、原図の御当地で所蔵地でもある岡山での今回の公開によって一通りの巡業を終える。復元の担当者として感慨深いものがある。見事に完成できた復元図とともに復元作業の雰囲気をお伝えできれば幸いである。今後、公開に制約のある原図に代わって復元図に活躍の場が広がることを期待している。

- (1)2009～2011年度科学研究費補助金基盤研究(A)「地図史料学の構築」の新展開—科学的調査・復元研究・データベース(研究代表者 東京大学史料編纂所・杉本史子 課題番号: 21242018)
(2)<http://maruta.be/kuniezu> 国絵図復元ブログ

国絵図復元ブログより



▲紙拵えが完了して描画へ 9月1日



▲大面積の海を彩色する 9月11日



▲膨大な数の村形を彩色する 9月14日



▲作業終盤の耳折へ 9月25日

国絵図復元の現場から

東京芸術大学大学院 教育研究助手 平 諭一郎

どのように復元するか

日本における絵画の制作は、古くより分業で行われてきたことはご存知だろうか。現代では画家が道具を調達し、紙やキャンバスを木枠や板に張り込み、絵を描き、額に入れば完成する。しかし、屏風や襖といった工芸的要素をもつ日本絵画の制作では、絵を描く工程の他に、絵を描くための下準備や、掛軸などの調度品に仕立てる工程、金銀箔を用いる工程、文字を書く工程など様々な工程において、それぞれを分業で行なってきた。絵画ではない国絵図においても同様の方法で製作されたであろう。

今回の国絵図復元では、(1) 描くための紙を準備する紙拵え(2) 墨や絵具を用いて絵図を描く(3) 文字を書き入れる(4) 出来上がった絵図をきれいに折り畳む、という4つの工程を経て完成させた。その中で、(1)(4)の装幀作業、(2)の描画作業は東京芸術大学のスタッフが、(3)の書記作業は筑波大学のスタッフが担当して行い、各工程での人工、材料、技法の再現を試みながら検証した。

紙拵え

まず、316.0cm×357.0cmという一枚の紙を用意することから始めなければならない。原本の熟覧調査と文献資料から厚手の雁皮紙を絵図の本紙として用いた。まず、本紙を薄美濃紙(楮を原料とする)で肌裏打ち⁽¹⁾を行い、仮張り⁽²⁾に張り込んだ後、滲み止めのために膠と生明礬の混合水溶液である礬水を刷毛で塗った。そして仮張りからはがした本紙を36×90cm程に裁ち、36枚を継いで1枚の紙に仕立てる。その後、八女紙(楮を原料とする)を用い、総裏打ち⁽³⁾を行った。通常は絵図を描き終えてから四辺をきれいに裁ち、耳折り⁽⁴⁾をしてから総裏打ちを行うと画面の裏側が、よりきれいに仕上がるが、原本では総裏打ちの後、耳折りされており、より簡易的な方法がとられている。

復元作業の中で、紙拵えが最も難しかった工程であった。何よりもその大きさが一つ一つの作業を困難にし、また水分を吸収し大幅に伸縮を繰り返す本紙をなだめ抑えることに苦労した。工程の再現を試みたことで、また別の紙拵えの方法の可能性も示唆できる結果となったことは一つの成果であろう。



▲礬水を塗る



▲36枚の紙を継いでいく



▲総裏打ち

びょうが 描画

描画方法については、原本の熟覧調査をもとに下図の転写、印判の存在、「えんぶた」の使用(えんぶたについては後述)を推定し、再現を試みた。

まず、原本に下図の転写痕跡を確認できたため、原寸大の下図を作成し、下図と本紙の間に念紙⁽⁵⁾（カーボン紙のようなもの）を挟んで、上からへらでなぞり下図を本紙へ写し取る。その後、転写された線を墨で描き起こした。また、楕円形の村型についても原本に押印時のズレのようなものが確認できたため、手書きではなく印判であると判断した。印判は金属製と木製の2種類を試し、今回は使い勝手の良い木製を使用した。実際にどちらを使用したかは判断できない。こうして線ですべての情報を描き終えた後、彩色の工程に移る。

隣国および海部の彩色には、今回の復元において最も重要である「えんぶた」を用いた。えんぶたとは、彩色をしない部分をあらかじめ紙で覆っておき、彩色後に剥がすことで任意の形をきれいに塗ることができる技法である（また、覆う紙のことも「えんぶた」と言う）。日本絵画の伝統的な技法のひとつであるが、現在では用いられていない。その手順は幾通りかあるが、今回はあらかじめ覆っておく部分の形に紙を整形した後、本紙の該当部分に布海苔⁽⁶⁾で貼り付け、彩色するという方法で行なった。覆う紙には礬水を塗った薄美濃紙を用いたが、海部に塗る藍などの染料系の色料では浸透してしまうため、ある程度の厚みのある紙が適当であると感じた。

隣国や海部、村型をはじめ、川や道、航路や国境も彩色していく。色料は、墨、胡粉、緑青、黄土、朱、丹、臘脂、藤黄、藍、岱赭を単色あるいは混色して用いた。藍については色の再現が難しく、本来はより明るく鮮やかな色をしていたと思われる。その後、山の点描や樹木の描写も行うことで絵図の密度が増していった。山の点描は下地に薄く彩色が施された上に数種類の色で描き分けられており、何を表現したものかも不明であるが、樹木の葉を表現したものの名残であるとも考えられる。

彩色を終えた後、村名や石高、隣国や方角などの文字を書き入れた。書記作業の詳細については中村裕美子氏に譲るが、彩色を終えた絵図の上から文字を書いていく作業は、彩色のスタッフ以上に、相当な勇気と覚悟が必要であったと推し量れる。



▲隣国の彩色



▲村形の彩色



▲山の点描

折り畳む

描画の際の本紙寸法は最終的なものより一回り大きい。もし同一寸法であるならば、画面の端に絵具の溜まりができるはずだが、原本にそのような痕跡は確認できなかった。つまり、絵図を描き終えてからきれいな矩形に裁ったと考えられる。江戸時代にどのようにして直角を形成したかは不明であるが、今回は三平方の定理を用いて直角をだして裁ち、四辺の端を耳折りした。次に、折り畳みによる擦れや傷がつかないように画面を保護す

るため、いぼた蠟という動物性の蠟を画面全体に摺り込んだ。その後、絵図を折り畳む。まず南北方向に山折りと谷折りを繰り返していく。同じように東西方向に山折りと谷折りを交互に折り、縦横のどちらも蛇腹折りにして畳んでいく。この時、本紙の継ぎ目と畳むときの折り目が重なると、折り畳みを繰り返すことで後に本紙の継ぎがとれてしまう可能性がある。原本では、本紙の継ぎ目と折り目は重なっていないため、あらかじめ絵図の寸法によって折り畳む寸法と折り目は計算されて



▲三平方の定理を用いて直角を出す



▲耳折りをする



▲絵図を折り畳む

いたものと推測される。しかし現存する絵図の寸法は様々であり、縮尺も一定していない。どのようにして絵図の寸法が決定されたのかについては考察がなされるべき課題であると考えられる。

復元を終えて

絵画ではない絵図というものの製作を振り返り、改めて描画と装潢の工程は一体的でなければならないということを強く感じた。皺しわのない平滑な本紙をこしらえることで、描画において斑のない均一な彩色が可能になり、薄く丁寧な彩色が施されれば、折り畳む際に絵具が剥落することもない。描画と装潢のどちらかが未熟ではうまくいかない作業であったということである。これだけの巨大な絵図面の裏打ちや四角に裁つという作業は、相当の技術とこの作業だけをする場所および人員の確保もさることながら、絵図製作に熟練した監修者の存在が不可欠であったと考えられる。

- (1) 本紙の裏に行う最初の裏打ち。
- (2) 木の骨組みに和紙を幾重にも重ねて貼り、表面に柿渋を塗ったもの。紙や裂を張り込んで乾燥させるために用いる。
- (3) 最終段階の裏打ち。裏面に露出する。
- (4) 画面の縁を裏面に向かって折り返す作業。
- (5) 今回は木炭の粉と胡粉を日本酒で溶いたものを薄美濃紙に塗ったものを用いた。
- (6) 海藻の一種で、水で抽出した液を一時的な接着剤として用いる。

国絵図の復元書写について

筑波大学大学院人間総合科学研究科
博士前期課程芸術専攻書領域 中村 裕美子

書写にあたって

復元の書写は、当時学群4年生の安生成美さん、馬場あやかさんと大学院1年だった私の3名で担当した。期間は、2010年9月18日～20日の3日間で、1日平均7～9時間程度作業した。3名で3日間というのは、決して余裕のあるわけではなかったが、なんとか書き終わられる妥当な期間であったように思う。原本では、若干、村形ごとに書風の変化がみられることから、複数人によって書かれた可能性が高いと考えられる。

書風は当時の幕府の公用書体であった「御家流^{おいえりゅう}」である。楷書、行書、草書、平仮名、片仮名、変体仮名が用いられており、同じ文字はほぼ同じくずし、字形で書かれてある。フェルトペンで書いたような鈍い始筆、畳み込むような複数の横画、全く角張ったところがみられないのが特徴的だ。原本に近づけようとすると、筆に墨をたっぷり含ませ、筆先を隠すようにゆっくりと送筆することが肝心であった。御家流の書は画一的で、模倣するのに比較的容易で、筆者間の差異が出にくい。このため、絵図の大きさや、作業の負担から考えても、複数名で書写されたとみるのが妥当ではないだろうか。

用いた道具は、筆は、3者各々使い慣れたもの（主に唐筆、イタチ毛、玉毛）を準備したが、中でも玉毛筆（猫毛）⁽¹⁾がそのたっぷりとした線質を表現するには最も適していた。墨は、当時の生産のほとんどを占めていたとされる菜種油煙墨⁽²⁾を用いた。

作業にあたっては、目録、方位、郡名、国境の表記、海辺の細かい文字に分担し、村形は3人で書き進めた。目録や国境の書写については、まっすぐ書くため、定規とヘラで中心線を引いた。村形など、多くが彩色された上に書写するが、下地となる色（絵具）によって書き易さが異なった⁽³⁾。作業中の留意点は、墨をこぼさないこと、書き間違いをしないことであった。書記の仕事は、表具、彩色を経たからの最終工程であり、書き直しがきかない。しかしながら、連日の作業のためか、村形の場所を誤って書写してしまうというアクシデントが起きた。書写内容を書き違えるということはなくとも、無数の村形

を一つたりとも誤りなく書くことは、相当な神経を使う作業だということを感じ、ミスなく書き終えることが最大の難関であったと思う。対処法としては、やすりで削り、重ねて彩色することで、事なきを得ることができた。まさしく作業をしてみてから初めて気づく、起こりうるアクシデントで、それでも対処できるということが実証できたのではないだろうか。

これだけの書写をミスなく、しかも優れた書で書くというのは、相当な修練を積んだ選ばれた者でなければ成し得ないことと、当時の書き役の技量の高さを実感した。



▲目録の書写



▲ヘラで中心を引く



▲村形の書写

- (1)長栄堂（熊野筆）を用いた。
- (2)古梅園（奈良墨）を用いた。松煙墨に比べ、光沢があることで知られる。
- (3)赤、茶、藍色の上には書き易く、桃、薄黄は比較的書きにくかった。

国絵図復元にむけて

■ 江戸時代の巨大な国絵図は、どのようにして作られたのか？

どのような技術者が何人？どのくらいの時間をかけて？どのくらいの場所が必要だった？これまでに文献を調べたり、科学分析をしたりしてきたが、まだまだ謎がたくさんある。そこで、実際に国絵図を作ってみることにした。

今回、復元したのは元禄年間（1688～1703）に作られた備前国絵図である。国絵図の中では小さい方だが、それでも3m16cm×3m57cmもある。

和紙をつないで巨大な画面を作るには表装の技術（掛軸や屏風を作る技術）、墨や絵具を使うには日本画の技術、文字を書き入れるには書道の技術、完成までには、いろいろな専門家が協力して1か月以上かかった。どうしても江戸時代の技術にかなわなかったところもあったが、復元制作をしてみて、はじめてわかった苦労や工夫もたくさんあった。

復元図や復元過程の記録から、多くの皆さんに、江戸時代の「モノを作る」という行為がどのようなものだったのかを具体的に感じていただければと考えている。

- 本復元研究は、岡山大学附属図書館所蔵「備前国絵図」（T1-20-1）を復元対象とし、科学研究費補助金基盤研究（A）「『地図史科学の構築』の新展開—科学的調査・復元研究・データベース—」（研究代表者 東京大学・杉本史子 課題番号:212042018）の一環として、東京芸術大学文化財保存学専攻保存修復日本画研究室が中心となって行った。

研究統括	杉本 史子 / 東京大学史料編纂所
復元統括	荒井 経 / 東京芸術大学
現場統括	染谷 香理・平 諭一郎 / 東京芸術大学
装潢・描画	古賀 海人・武田 裕子・彭 偉新・京都 絵美 / 東京芸術大学博士後期課程
書記	中村 裕美子 / 筑波大学博士前期課程
	安生 成美・馬場 あやか / 筑波大学芸術専門学群
描画	五十嵐 有紀・上田 茉莉・鈴木 博雄・韓 明旭・平尾 杏奈・安原 成美 / 東京芸術大学修士課程
村形印作成	（金属）川地 あや香・（木版）吉田 潤 / 東京芸術大学
技術指導	村岡 ゆかり・高島 晶彦・山口 悟史 / 東京大学史料編纂所

■ 東京芸術大学 文化財保存学 保存修復日本画研究室について

東京芸術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻は、文化財の保存修復ならびに保存科学に関する研究と、専門家の養成を通して、文化財の保存に寄与することを目的として設立された。

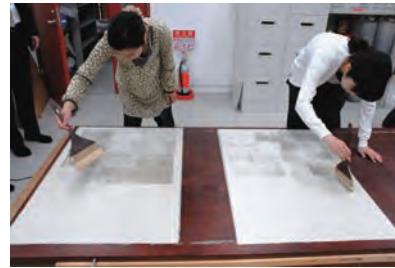
保存修復日本画研究室では、古典絵画の模写と修復を通して伝統技法を習得し、さらに自然科学や美術史などの分野を踏まえた古典技法の解明や、図像の復元研究を行っている。

かみこしら 紙拵え

絵図を描くために必要な紙（本紙）の準備をする。原本の熟覧調査と文献資料から厚手の雁皮紙を生麩糊で36枚継ぎ合わせ、本紙として用いた。

■ 磬水引き

滲み止めのために、^{にかわ} 膠と^{きみょうばん} 生明礬の混合水溶液である磬水を刷毛で塗る。

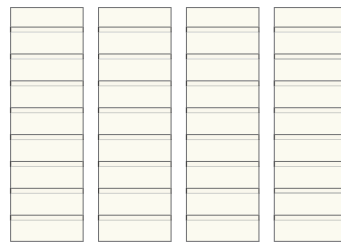
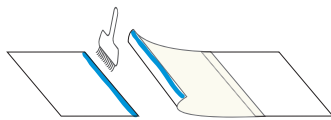


仮張りに張り込んだ状態で磬水を塗る→

■ 紙継ぎ

まず南北方向の9枚を初めに継いで帯状の紙を4セット作り、次に東西方向に4セットの紙を継いでいく。

継ぎしろは1.0～1.2/cm



88.8	91.0	91.4	85.8	(cm)
	北			28.2
				36.7
				36.8
西			東	36.8
				36.9
				36.9
				36.9
				36.8
	南			29.5

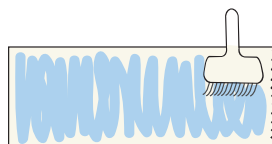


■ 総裏打ち

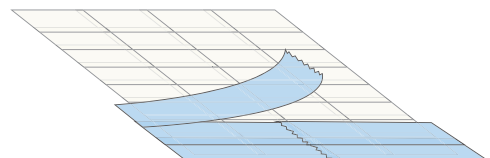
あらかじめ28cm×170cmに継いだ楮紙（八女紙）で総裏打ちをする。



八女紙に糊をつける



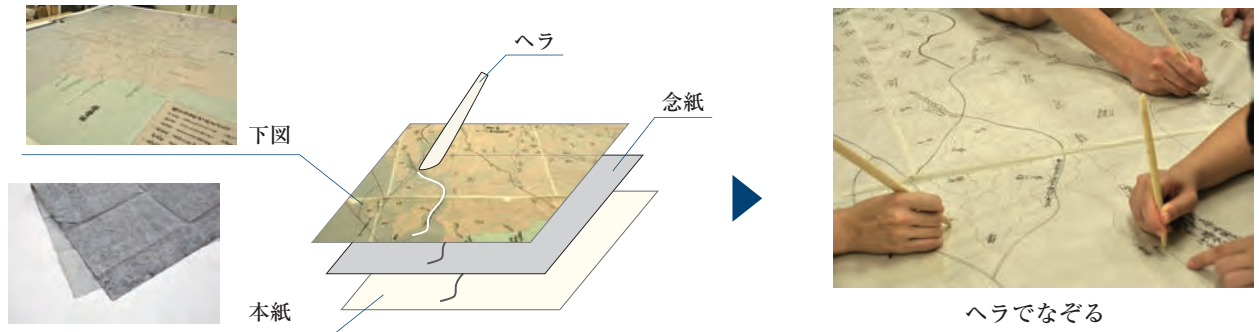
本紙の裏側に貼っていく



線描・押印

■ 転写

本紙の上に念紙と下図を重ね、上からヘラでなぞると図像が転写できる。
念紙とは、カーボン紙のような転写用紙のことである。墨と胡粉（貝殻を砕いて作った白い絵具）を日本酒で溶き、薄い楮紙に塗って作る。



■ 線描き

余分に付いてしまった念紙の粉を刷毛で除去し、転写した下描き線を墨で描き起こす。



■ 押印

木版で作った村形印に墨をつけて押す。

これまでの調査から、小判型の印判が使われたことがわかっている。金属と木版の印判を作って試した結果、木版の印を使うことにした。

村形は、まず小判型の印を押し、彩色してから、再び輪郭線を筆で描き起こしたと考えられる。



金属村形判制作工程



木版村形印判制作工程



日本絵画の絵具について

■日本絵画の絵具

今日、日本画と呼ばれる技法は、岩石や土、貝殻、虫、植物に由来する顔料や染料の絵具と、膠という動物性の接着剤を用いて描くものである。

■顔料

日本画の顔料で代表的なものに、天然の鉱物を砕いた群青^{ぐんじょう}、緑青^{ろくしょう}などの岩絵具がある。岩絵具は、粒子が粗いほど色が濃く、細かいほど淡い色になる。また、貝殻を砕いてつくられる胡粉^{ごふん}は日本画の代表的な白色顔料である。このほか染料に由来する藍^{えんじ}や臘脂^{とうおう}、藤黄などの透明色も使われる。



孔雀石（緑青の原石）



いたば牡蠣（胡粉の原料）



藤黄（海藤樹の樹液）

■膠

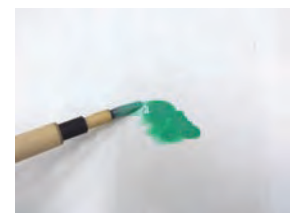
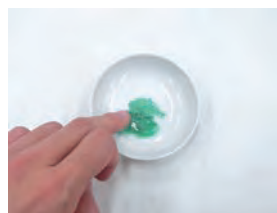
膠は、牛などの動物の皮や骨、腱から抽出される接着剤である。顔料を紙や板などに接着させる役割のほか、生明礬を加えて礬水をつくり、にじみ止めにも用いる。



■絵具の溶き方



顔料に膠液を少しずつ加え、指で練り合わせる



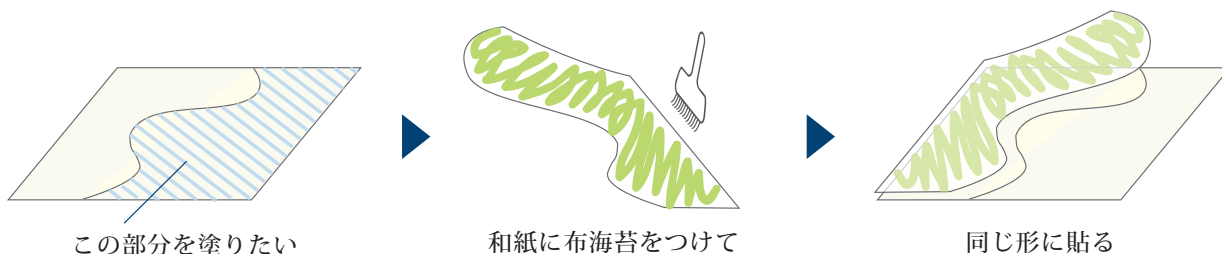
水際の部分をすくいとり、置くように塗る

えんぶた

■ えんぶた

周辺の国に色を塗るため、「えんぶた」をする。

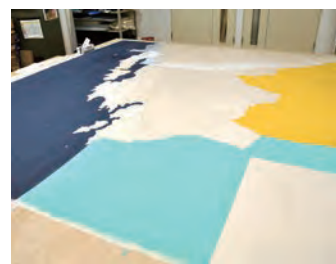
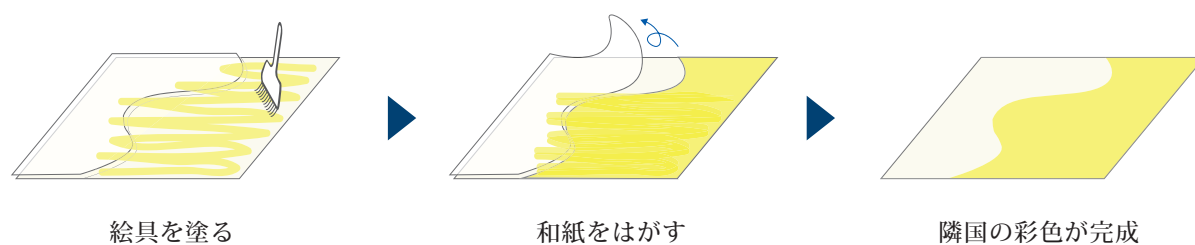
「えんぶた」とは、絵具を塗りたくない部分に薄い和紙を布海苔で貼っておくマスキング技法である。



*布海苔とは、海草の一種で、水やお湯で抽出した液を、弱い接着剤として使用する。



「えんぶた」を貼った上から絵具を塗り、乾いたあとに「えんぶた」の和紙をはがすと、きれいな輪郭線の形に彩色することができる。



補足

「えんぶた」の手順は大きく二通りある。まずひとつは、広範囲に「えんぶた」の紙を貼った後、マスキングしたいところの形にあわせて「えんぶた」の紙を切除するという方法。もう一つは、あらかじめマスキングする部分の形に「えんぶた」の紙を切っておいてから、該当部分に貼るという方法である。どちらの方法も長所と短所があり、前者は実際の線描にあわせて切るため形が正確だが、本紙まで切ってしまうというリスクがある。後者は逆に、本紙を損なうことはないが、紙の収縮によって実際の線描との間に誤差が生じてしまう可能性がある。今回の復元では、後者を採用した。

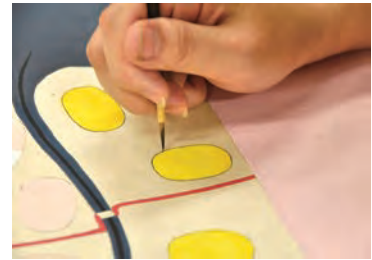
彩色・文字

■ 彩色

* 隣国および海を塗る

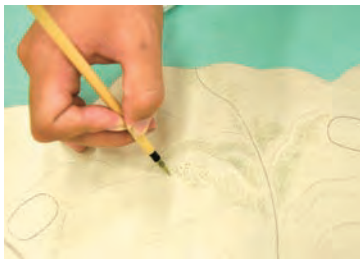
美作国は、黄土+胡粉、播磨国は、白緑+胡粉、備中国は、臙脂+胡粉をそれぞれを3回塗った。
海は、藍+胡粉を7回塗って仕上げた。

* 村形、道、航路、国境などを塗る



村形を、津高…藤黄+胡粉、岩生…丹+墨+胡粉、児島…藍+藤黄+胡粉、上道…臙脂+胡粉、
和気…丹+藤黄+胡粉、赤坂…白緑青、三野…丹+胡粉、邑久…朱で彩色する。
また、道、航路を朱、川を藍+胡粉、国境、一里塚、村型のくくりを臙墨で彩色する。

* 山の隈取りおよび点描



山の隈取りおよび点描は、緑色…(草汁) 藍+藤黄、青色…藍、灰色…淡墨、橙色…岱楮+藤黄の4色で描き、樹木の葉を(草汁) 藍+藤黄と緑青で描いた。

■ 文字

彩色が終わった絵図に文字を書き入れていく。玉毛筆と油煙墨を使用し、江戸幕府の公用書体として用いられた御家流という書体で揮毫した。目録や国境部分では文字がまっすぐ書かれており、ヘラで中心線をとった上に揮毫することで、文字のズレを防いだと考えられる。



耳折り・畳み

■ 耳折り

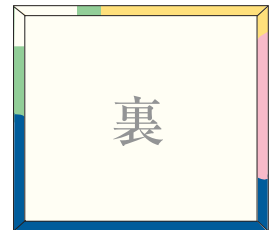
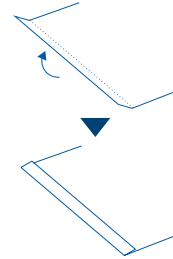
描き終えた絵図を矩形に裁ち、四辺の端を裏側に折り返して、糊で接着する。



ヘラで筋をつける



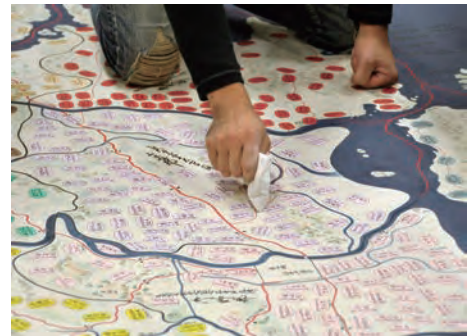
折り返して接着する



絵図を裏側から見た図

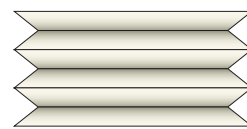
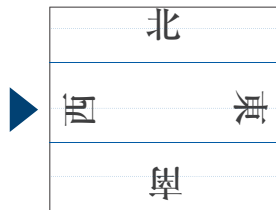
■ 画面の保護

画面を保護するため、いぼた蠟ろうという動物性の蠟を画面全体に摺り込んだ。



■ 畳む

ヘラで筋をつけて蛇腹に折り畳んでいく。



南北方向を折り畳む



東西方向を折り畳む

■ 完成



文字を書き入れて完成



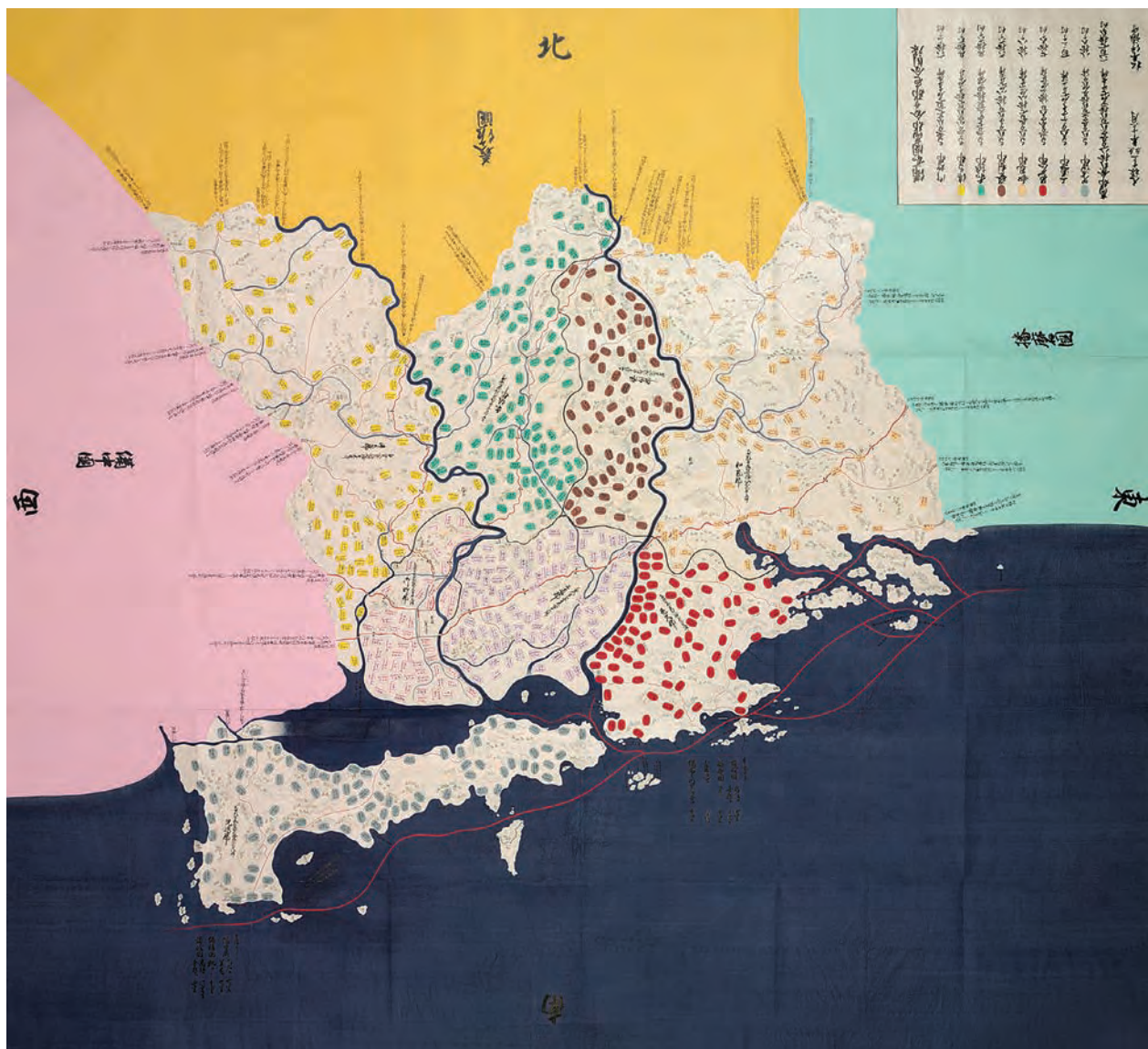
畳まれた絵図



和室にて広げる

出展資料解説

[第1部] 国絵図復元



1 復元元禄備前国絵図 2010年 316.0 × 357.0cm 撮影：東京大学史料編纂所

[第2部] 元禄国絵図の世界

元禄備前国絵図（2～5）



2 ^{びぜんのくにえず} 備前国絵図 T1-20-1 1鋪 元禄13年(1700)12月 316.0 × 357.0cm

岡山藩が提出した元禄国絵図の控図。松平伊予守は岡山藩主の池田綱政。本絵図は石島山国境争論の決着をうけて元禄16年(1703)に再提出されたものだが、日付は最初に絵図を提出した時のままになっている。

今回復元国絵図の原本になったもの。

3 箱

T1-20 1箇
元禄13年(1700)12月
65.5 × 57.3 × 11.5cm

備前国絵図(2)と備前国郷帳(4)がそれぞれ畳紙に包まれて収められている。貼紙から、おおなんとおおなんどが管理する藩主御手元の備品であったことが分かる。堂々として風格のある作りである。





4 ^{びぜんのくにこうちょう} 備前国郷帳 T1-20-2 1冊 元禄13年(1700)12月 32.0×23.0cm

元禄国絵図と一緒に提出された備前国の郷帳。郡別に村ごとの石高が書き上げられており、記載内容は絵図上の書付と一致する。



5 ^{ふたうらがき} 箱(蓋裏書) T1-19 1箇 元禄13年(1700)12月 65.8×56.4×2.7cm

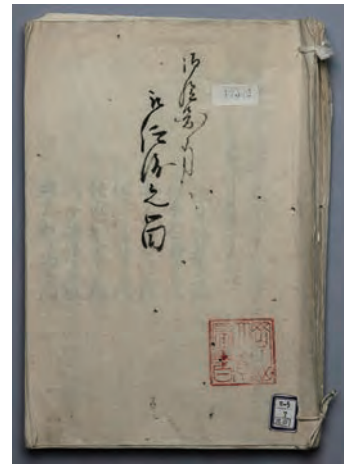
岡山藩には、郷帳と組になった正規の控図(T1-20-1)とは別に、ほぼ同じ仕様の控図が2枚ある。ただし、内1鋪には年月と作成人名がない。この2鋪が1つ箱に入れられており、箱の貼紙は「学校」の管理であったことを示しているが、2鋪ともが当初から「学校」にあったかどうかは定かでない。年月・人名を欠くものは汚れがはげしく、郡会所などで利用されていたものかもしれない。箱上蓋には、正規の控図の箱と同じ裏書があり、争論の裁許を受けて再提出した経緯が書かれている。岩田十大夫・石丸平七郎・加世藤三郎はいずれも郡奉行で、国絵図担当役人。ただし、こちらには署名人に印判がないから、控のうちでも予備の方を収めたものだと思われる。箱の作りもやや簡素である。

元禄備中国絵図（6～7）



びつちゅうのくにしんおん え ずうし
 6 備中国新御絵図写 T1-21 1 鋪 元禄14年(1701) 371.4 × 268.0cm

備中国の絵図元は松山藩安藤氏で足守藩木下氏が補助した。目録にある安藤長門守は安藤信友、木下肥後守は木下^{きんさだ}昏定である。岡山藩が作成した写図で、備前国の控図よりは簡略な仕様である。



7 箱 T1-21 1箇 元禄14年(1701) 58.5 × 36.0 × 6.1cm

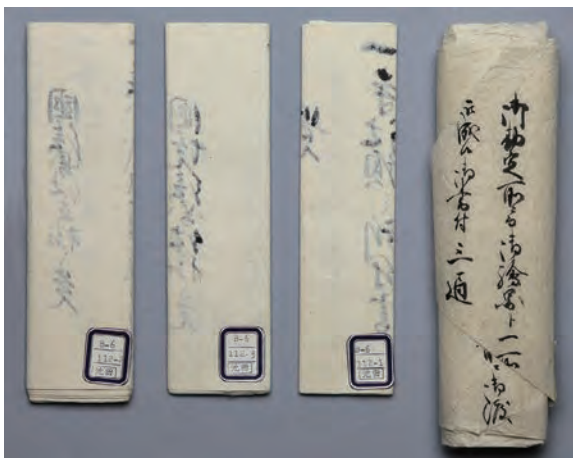
備中国絵図が収められている箱。貼紙から、備前国絵図と同様に大納戸方が管理していたことが分かる。箱の仕様も、備前国絵図のものより略式である。控図と写図の扱いの差は歴然としている。

8 御絵図方被仰渡之留

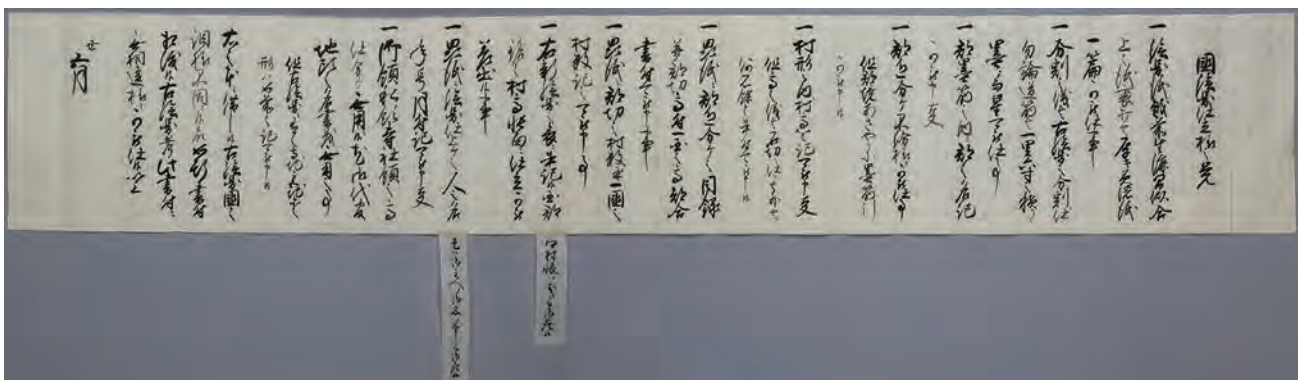
おんえ ず かつたおせわたさるのとめ
E5-7 1冊
元禄10年(1697)2月～
同17年(1704)3月
29.6 × 20.4cm

元禄国絵図の制作にあたって幕府から指示された事項を、岡山藩江戸留守居が書き留めた帳面。国元の家老中と遣り取りした書状なども含まれている。

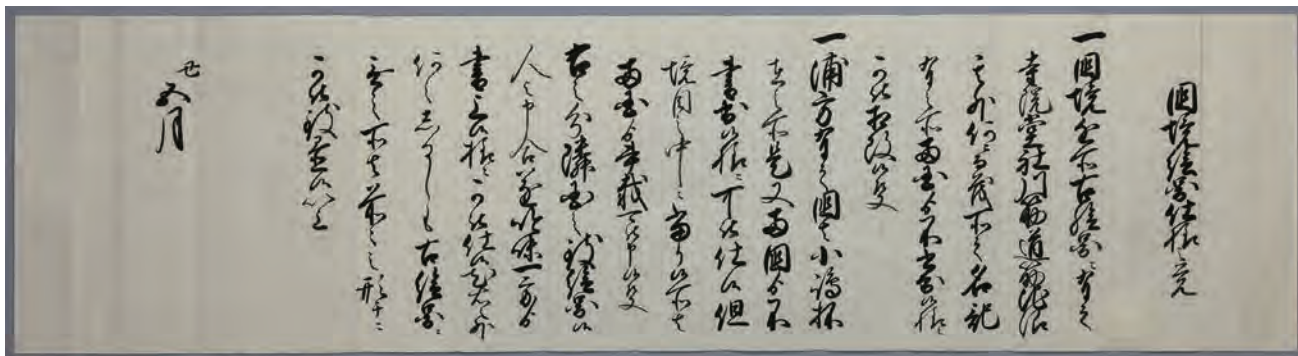
おかんじょうしょにておんえずといっしょにおわたしなされそうろうおんかきつけさんつう
御勘定所二而御絵図ト一所二御渡被成候御書付三通 (9~11)



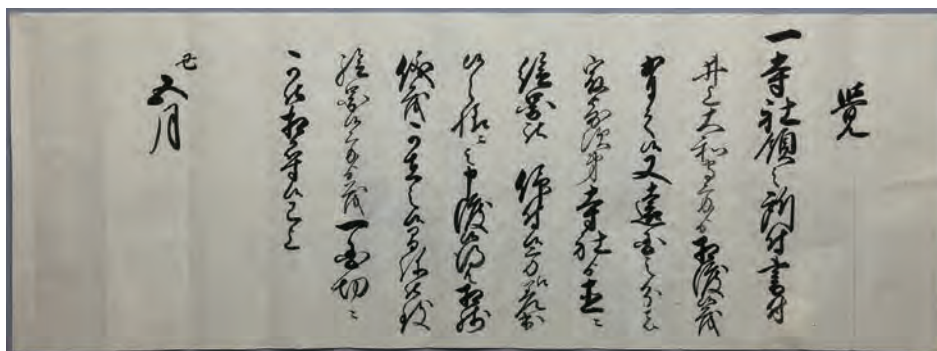
元禄10年5月21日に幕府勘定所へ呼び出され、正保の国絵図を渡されたときに、御勘定衆から指示された条目。改訂の基本的な事項が示されている。



くにあずしたてようのおぼえ
9 国絵図仕立様之覚 B6-112-2 1通 元禄10年(1697)5月 17.3 × 101.7cm



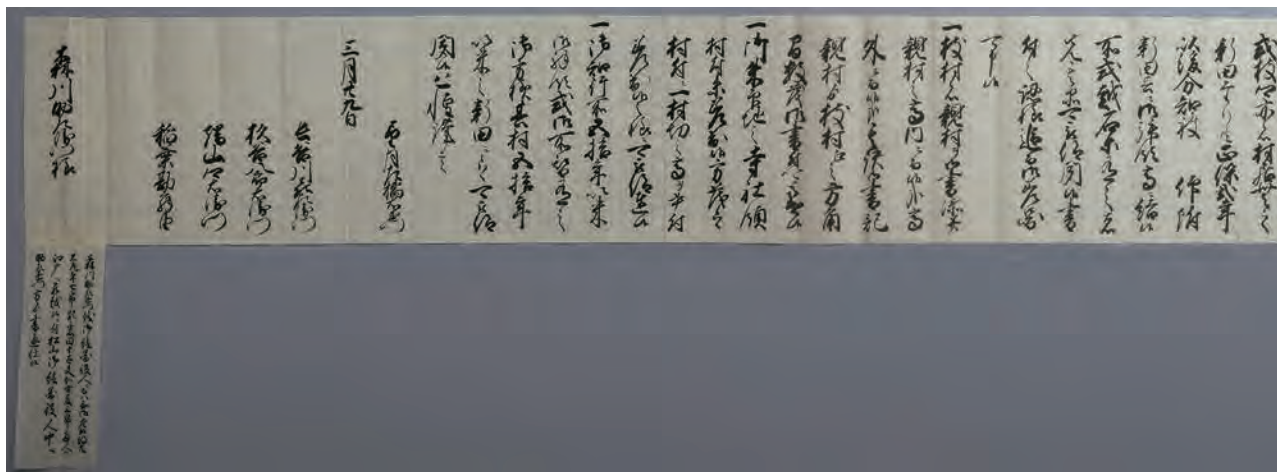
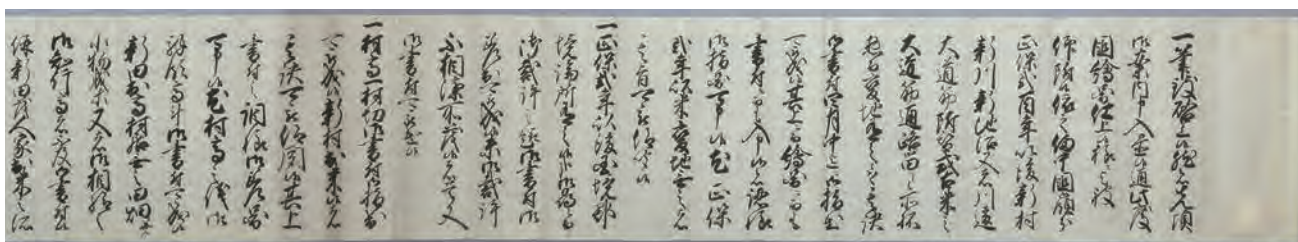
10 国境絵図仕様之覚 B6-112-3 1通 元禄10年(1697)5月 17.3 × 66.2cm



11 覚 B6-112-1 1通 元禄10年(1697)5月 17.4 × 48.3cm

まつやまおんえずおんやくにんちゅうよりきたるしよじょうのうつしさんつう
松山御絵図御役人中方来ル書状之写三通 (12~14)

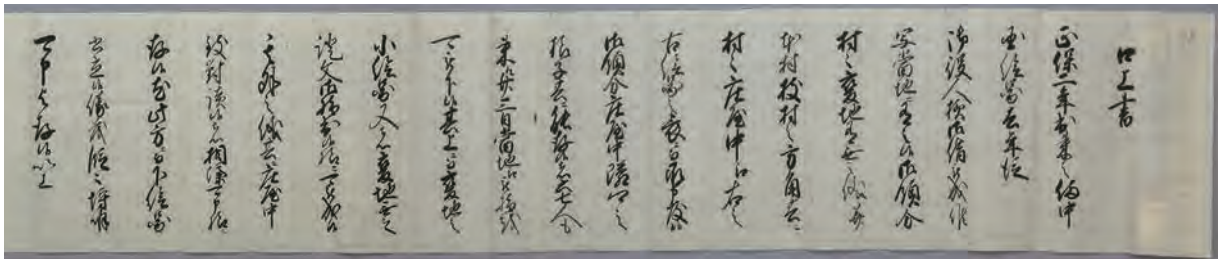
「備中御領分御絵図之儀ニ付品々書付」と表書された袋入り一件史料（1冊10通）のうち、「松山御絵図御役人中方来ル書状之写三通」と書かれた包紙に包まれた書状3通。備中国の絵図元である松山藩安藤氏の絵図役人から、岡山藩の備中国分村々について調査を要請した書状。



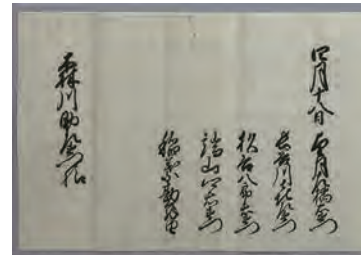
12 森川助左衛門宛稲葉勘解由他4名書状 B6-140-4 1通 元禄11年(1698)力3月29日 16.5 × 188.6cm



13 森川助左衛門宛稲葉勘解由他4名書状
B6-140-5 1通 元禄11年(1698)力4月11日 16.5 × 180.3cm

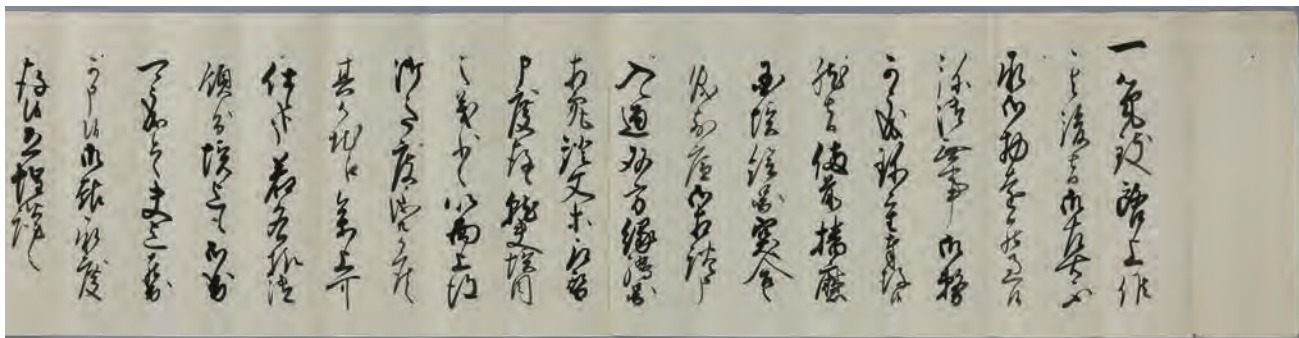


14 森川助左衛門宛稲葉勘解由他4名口上書
B6-140-6 1通
元禄11年(1698)力4月18日
16.4 × 106.4cm



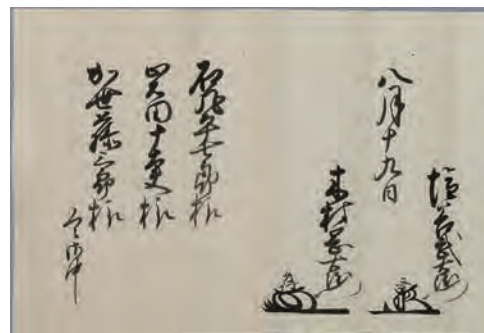
15 石丸平七郎他1名宛稲葉勘解由他4名書状
E5-54-15 1通 (年未詳)9月20日 16.9 × 125.4cm

備前国と備中国との国境縁絵図について、岡山藩からの問い合わせに対する松山藩絵図役人からの返書。備前国の下絵図の拝見も依頼している。



16 いしまるへいしちろうほかにもいあてきむらおかえもんほかいちめいしよじょう
石丸平七郎他2名宛木村岡右衛門他1名書状
E5-54-12 1通 (年未詳) 8月19日 17.4cm×95.0cm

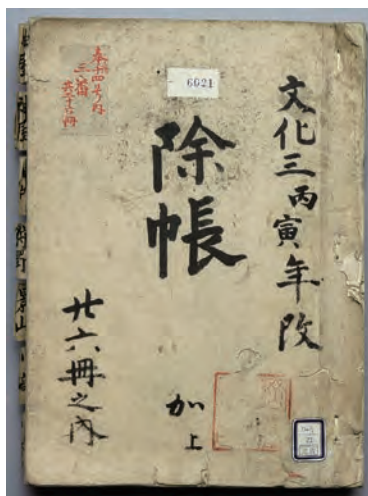
姫路藩絵図役人から岡山藩絵図役人への書状。双方の国境
縁絵図について確認するため、領分境まで出張して相談した
いと依頼している。



えしほうこうがき
絵師奉公書 (17~20)

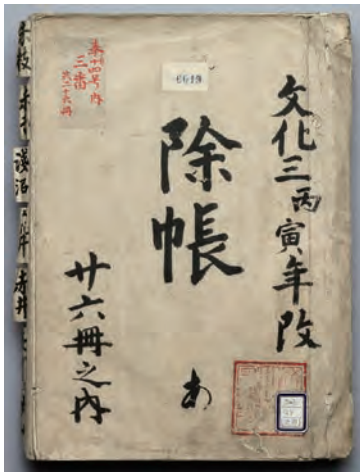
国絵図の制作には藩お抱えの絵師が携った。いずれも狩野派の絵師で、国元や江戸で従事している。元
禄国絵図の制作に関わったのは、狩野幽直・狩野幽知・狩野自得・和田幽伯・荒井永喜である。永喜は控図
や縁絵図の作製に、幽伯は備中国絵図の写図の制作に関わったことも確認できる。

17 かのうゆうえいほうこうがき
狩野幽英奉公書
D4-21-4 1冊
元禄9年(1616)~
宝暦9年(1759)
27.4×19.9cm

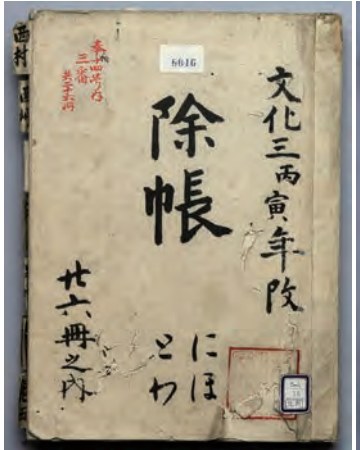


18 かのう ほうこうがき
狩野董雄奉公書
D3-888 1冊
宝永6年(1709)~
明治4年(1871)
27.6×20.5cm





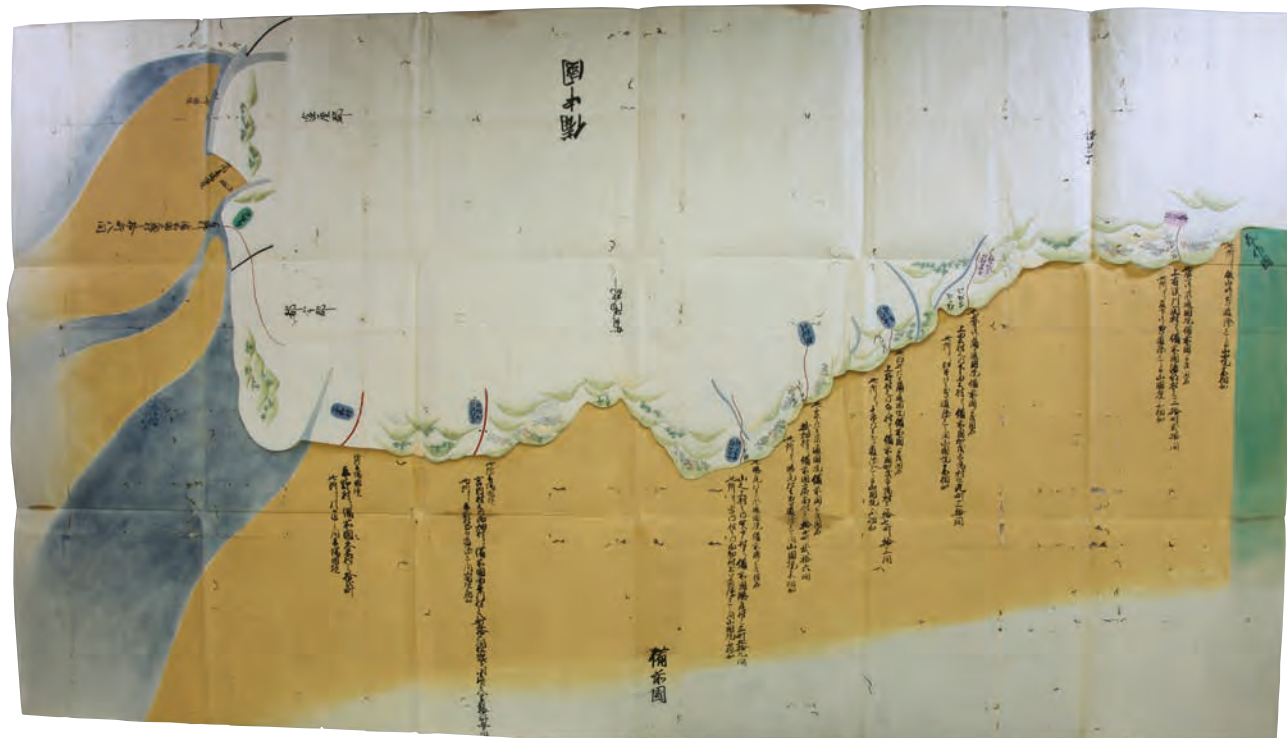
19 あらいえいきほうこうがき
荒井永喜奉公書
D4-19-4 1冊
宝永元年(1704)～
明和6年(1769)
27.6 × 19.9cm



20 わだゆうはくほうこうがき
和田幽伯奉公書
D4-16-11 1冊
宝永元年(1704)～
明和6年(1769)
27.4 × 19.9cm

びっちゅうのくにへりえず
備中国縁絵図 (21～24) 1組4鋪 元禄14年(1701)4月 早島町教育委員会所蔵

備中国の国境を備前方・美作方・伯耆方・備後方に分けて描いた1組の縁絵図。いずれも切形絵図に仕立てられている。袋と思われる断片の上書によれば、他に「備中国海辺縁絵図」が一緒にあったと思われるが、今はない。代わりに現在は「備中国之方美作国縁絵図」が一緒になっている。妹尾村の庄屋に伝えられたものだという。



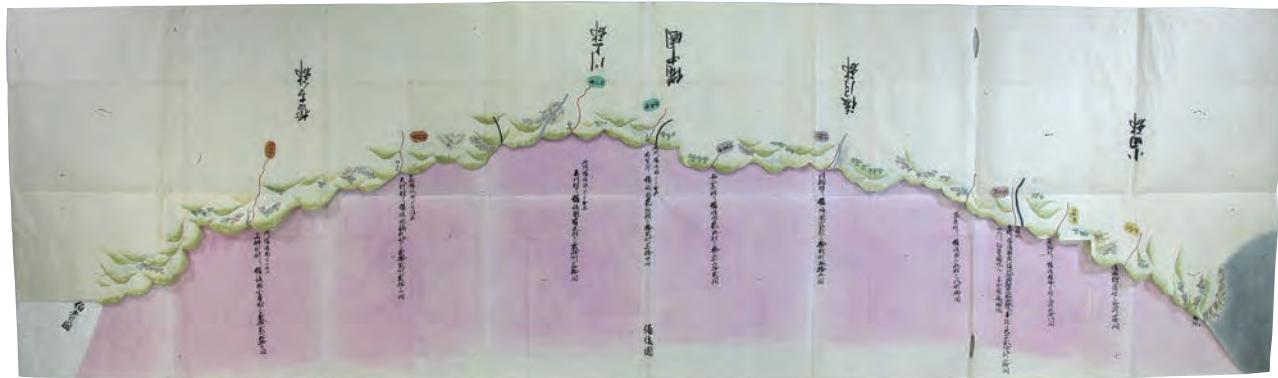
21 びげんのくにのかたびっちゅうのくにへりえず
備前国之方備中国縁絵図 1鋪 元禄14年(1701)4月 107.8 × 192.6cm 早島町教育委員会所蔵



22 ^{みまさかのくにのかたびちゅうのくにへりえず} 美作国の方備中国縁絵図 1 鋪 元禄14年(1701)4月 73.8 × 121.6cm 早島町教育委員会所蔵



23 ^{ほうきのくにのかたびちゅうのくにへりえず} 伯耆国の方備中国縁絵図 1 鋪 元禄14年(1701)4月 78.4 × 117.2cm 早島町教育委員会所蔵



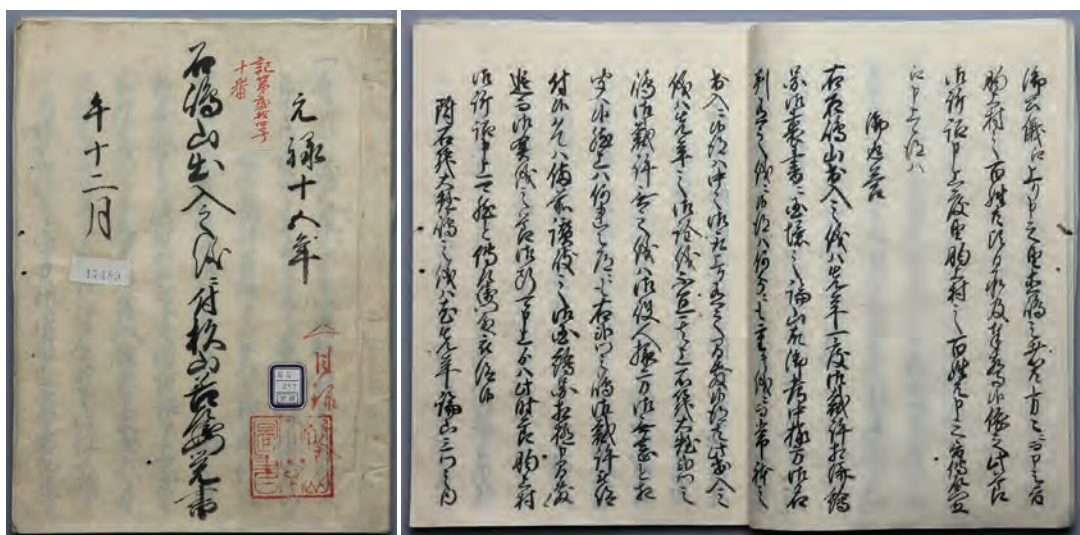
24 びんごのくにのかたびつちゅうのくにへりえず
備後国之方備中国縁絵図 1 鋪 元禄 14 年 (1701) 4 月 76.8 × 265.6cm 早島町教育委員会所蔵



25 びつちゅうのくにのかたままさかのくにへりえず
備中国之方美作国縁絵図 1 鋪 元禄 13 年 (1700) 11 月 79.0 × 182.4cm 早島町教育委員会所蔵

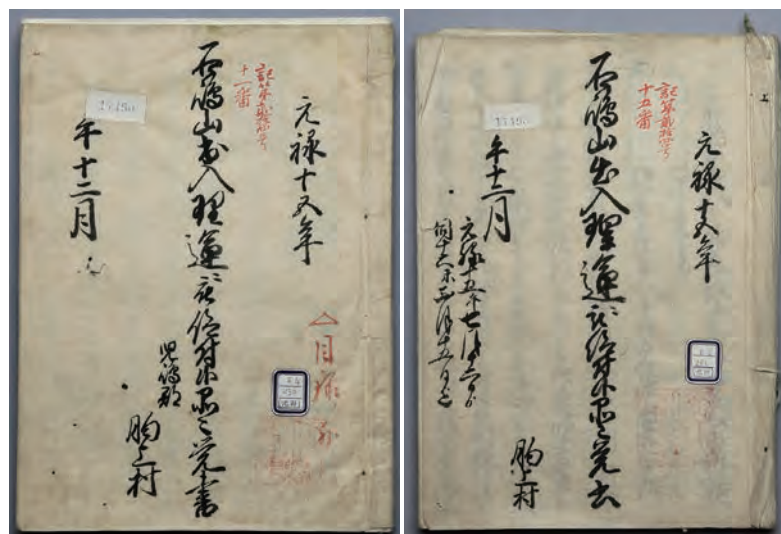
すずきそうだゆう
備中国向けの美作国縁絵図。津山藩松平備前守内鈴木惣大夫他 2 名から松山藩安藤長門守内木村三郎右衛門・足守藩木下肥前守内神原弥右衛門にあてたもの。切形になっていない写図である。国境の形が備中側の縁絵図 (22) とは一致せず、日付も早いので、後に備中側と立会のうゑで修正されたと思われる。

石島山国境争論関係史料 (26 ~ 27)



26 いしまやまでいりのぎにつきすぎやまぜんざえもんおぼえがき
 石島山出入之儀二付杉山善左衛門覚書
 E4-257 1冊 元禄15年(1702)12月 28.0cm×20.7cm

讃岐国との国境について再提訴するため、岡山藩が幕府と折衝した記録。杉山善左衛門は幕府代官の推薦で岡山藩が召し抱えた地方巧者^{じかたこうしゃ}。その知識と人脈を活用して、再訴の実現と勝利に貢献した。幕府御勘定の諸星伝左衛門は、石筏・大蛭^{いしいかだ おおひる}2島の帰属が未確定なので、備前・讃岐の国絵図は極まらないと示唆している。



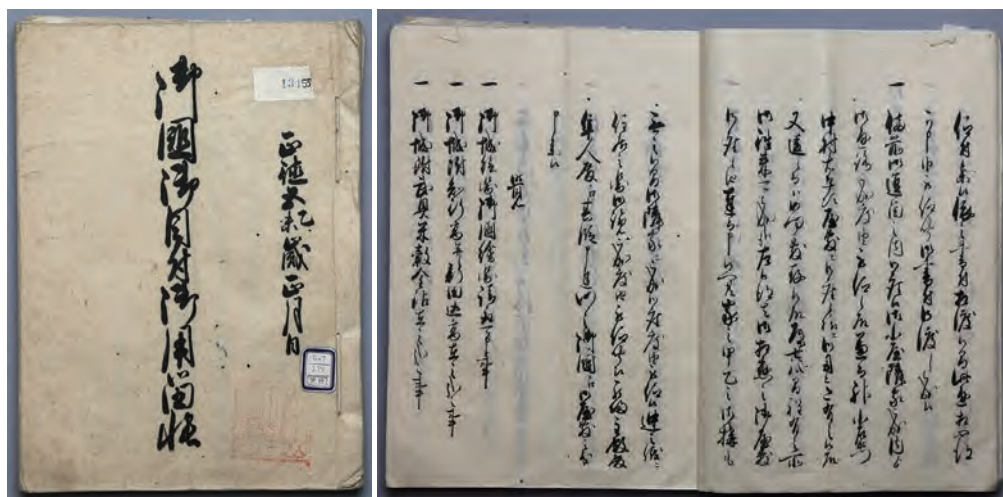
27 いしまやまでいりうんにおおせつけられそうろうしなじなおぼえがき
 石島山出入理運二被仰付候品々覚書
 E4-258・261 2冊 元禄15年(1702)12月 28.5×20.5cm

石島をめぐる訴訟は児島郡胸上村が主体となって起こした。その提訴から裁許に至る経過を整理して記録したもの。この裁許を受けて、備前国絵図は修正のうえ再提出されることになった。正本と副本の2冊がある。



28 ^{びぜんのかくにえず} 備前国絵図 T1-15 1 鋪 正徳5年(1715)8月 167.6 × 202.6cm

^{つぐまさ} 継政の家督相続にあたって幕府から派遣された^{かんし} 監使 (国目付) の参観に提供した元禄国絵図の縮図。縮尺はおよそ60%。控図と同じ仕様で仕立てられている。松平大炊頭は継政のことで、前年の12月18日に父綱政の遺領を相続した。「奉公書」(19)から荒井永喜と倅の三太郎(のち永直)が制作にあたったことが知られる。



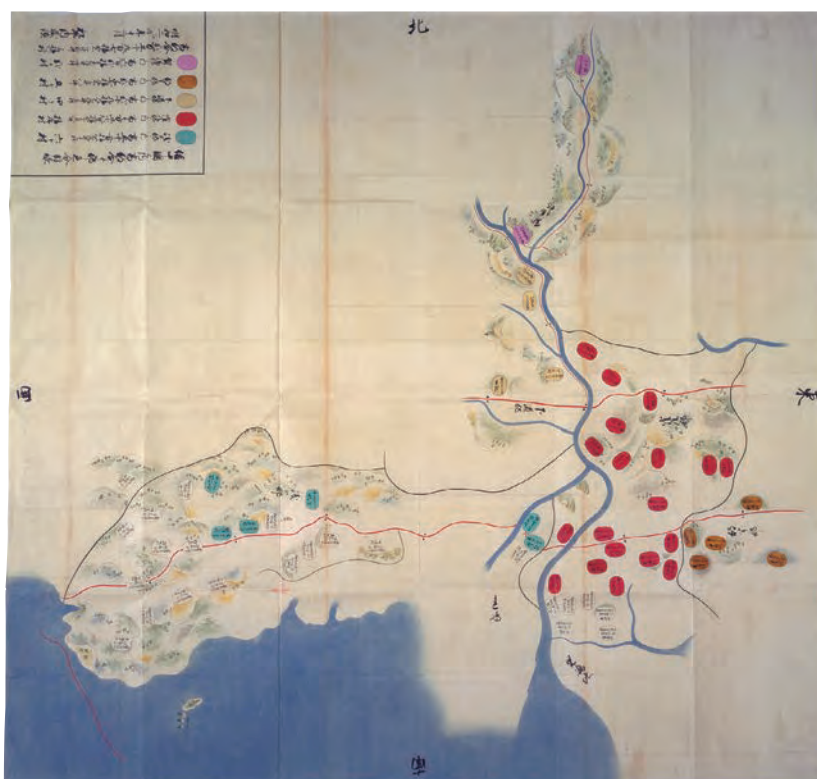
29 ^{おくにおめつけごようとめちよう} 御国御目付御用留帳 C7-179 1 冊 正徳5年(1715)正月 26.8 × 19.8cm

継政相続にあたって派遣された幕府監使(国目付、曾我平次郎・中野左兵衛)の応接に関わる諸事を書き留めたもの。正月25日に江戸で渡された「覚」に、城絵図・国絵図を請け取るようにとある。



30 びぜんのくにえず 備前国絵図 T1-2 1 鋪 明和2年(1765)11月 163.2 × 199.8cm

治政の家督相続にあたって幕府から派遣された監使(国目付)の参観に提供した元禄国絵図の縮図。縮尺はおおよそ60%だが、正徳期のもの(28)に比べてやや小振りで簡略な仕様である。松平内蔵頭は治政のことで、前年の5月10日に父宗政の遺領を相続した。

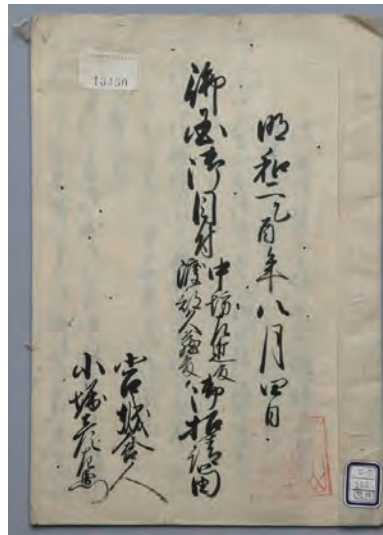


31 びつちゅうのくにのうちおかやまごりょうぶんえず 備中国之内岡山御領分絵図 T1-40 1 鋪 明和2年(1765)12月 125.6 × 134.2cm

元禄備中国絵図のうち、岡山藩領分と支藩の鴨方藩領分を書き抜いたもの。岡山藩領の村は郡ごとに色分けされているが、鴨方藩領分は白地のままである。30とともに幕府監使(国目付)の参観に供したもので、縮尺・仕様とも同じである。



32 おくにおめつけしよとめ
御国御目付諸留
C7-180 1冊
明和2年(1765)4月～同3年(1766)8月
29.0 × 19.7cm



33 おくにおめつけおひかえおとめ
御国御目付御控御留
C7-182 1冊 明和2年(1765)8月 28.7 × 19.7cm

2冊とも、治政相続にあたって派遣された幕府監使（国目付、中坊左近・渡部久蔵）の応接に関わる諸事を書き留めたもの。宮城舎人・小堀彦左衛門は岡山藩の小仕置。



34 びぜんびつちゅうくにざかいそうろんさいきよえず
備前備中国境争論裁許絵図

1 鋪 宝暦8年(1758)6月 177.0 × 215.0cm 岡山市指定重要文化財 岡山市教育委員会所蔵

寛延訴訟(1749～50)に続いて備中方と備前児島方が争った。裁許では、干潟での備中方の用益権が認められたが、国境は寛延裁許の通りとされ、やはり元禄国絵図と縁絵図が証拠とされた。この裁許絵図は妹尾村に伝えられたもの。絵図の裏に裁許文言が記されている。

展示資料目録

番号	資料名	員数	年代	法料 (cm)	池田家文庫整理番号・ 所蔵先
[第1部] 国絵図復元					
参考出展	国絵図復元制作用具	一式	現代		東京芸術大学大学院 保存修復日本画研究室
1	復元元禄備前国絵図	1 鋪	平成22年(2010)	316.0×357.0	
[第2部] 元禄国絵図の世界					
2	備前国絵図	1 鋪	元禄13年(1700)12月	316.0×357.0	T1-20-1
3	箱	1 箇	元禄13年(1700)12月	65.5×57.3×11.5	T1-20
4	備前国郷帳	1 冊	元禄13年(1700)12月	32.0×23.0	T1-20-2
5	箱 (蓋裏書)	1 箇	元禄13年(1700)12月	65.8×56.4×2.7	T1-19-1
6	備中国新御絵図写	1 鋪	元禄14年(1701)	371.4×268.0	T1-21
7	箱	1 箇	元禄14年(1701)	58.5×36.0×6.1	T1-21
8	御絵図方被仰渡之留	1 冊	元禄10年(1697)2月～ 同17年(1704)3月	29.6×20.4	E5-7
9	国絵図仕立様之覚	1 通	元禄10年(1697)5月	17.3×101.7	B6-112-2
10	国境絵図仕様之覚	1 通	元禄10年(1697)5月	17.3×66.2	B6-112-3
11	覚	1 通	元禄10年(1697)5月	17.4×48.3	B6-112-1
12	森川助左衛門宛稲葉勘解由他 4名書状	1 通	元禄11年(1698)カ 3月29日	16.5×188.6	B6-140-4
13	森川助左衛門宛稲葉勘解由他 4名書状	1 通	元禄11年(1698)カ 4月11日	16.5×180.3	B6-140-5
14	森川助左衛門宛稲葉勘解由他 4名口上書	1 通	元禄11年(1698)カ 4月18日	16.4×106.4	B6-140-6
15	石丸平八郎他1名宛稲葉勘解由他 4名書状	1 通	(年未詳)9月20日	16.9×125.4	E5-54-15
16	石丸平七郎他2名宛木村岡右 衛門他1名書状	1 通	(年未詳)8月19日	17.4×95.0	E5-54-12
17	狩野幽英奉公書	1 冊	元禄9年(1696)～ 宝暦9年(1759)	27.4×19.9	D4-21-4
18	狩野董雄奉公書	1 冊	宝永6年(1709)～ 明治4年(1871)	27.6×20.5	D3-888
19	荒井永喜奉公書	1 冊	宝永元年(1704)～ 明和6年(1769)	27.6×19.9	D4-19-4
20	和田幽伯奉公書	1 冊	宝永元年(1704)～ 明和6年(1769)	27.4×19.9	D4-16-11
21	備前国之方備中国縁絵図	1 鋪	元禄14年(1701)4月	107.8×192.6	早島町教育委員会
22	美作国之方備中国縁絵図	1 鋪	元禄14年(1701)4月	73.8×121.6	早島町教育委員会
23	伯耆国之方備中国縁絵図	1 鋪	元禄14年(1701)4月	78.4×117.2	早島町教育委員会
24	備後国之方備中国縁絵図	1 鋪	元禄14年(1701)4月	76.8×265.6	早島町教育委員会
25	備中国之方美作国縁絵図	1 鋪	元禄13年(1700)11月	79.0×182.4	早島町教育委員会
26	石島山出入之儀二付杉山善左 衛門覚書	1 冊	元禄15年(1702)12月	28.0×20.7	E4-257
27	石島山出入理運二被仰付候 品々覚書	2 冊	元禄15年(1702)12月	28.5×20.5	E4-258・261
28	備前国絵図	1 鋪	正徳5年(1715)8月	167.6×202.6	T1-15
29	御国御目付御用留帳	1 冊	正徳5年(1715)	26.8×19.8	C7-179
30	備前国絵図	1 鋪	明和2年(1765)11月	163.2×199.8	T1-2
31	備中国之内岡山御領分絵図	1 鋪	明和2年(1765)12月	125.6×134.2	T1-40
32	御国御目付諸留	1 冊	明和2年(1765)4月～ 同3年(1766)8月	29.0×19.7	C7-180
33	御国御目付御控御留	1 冊	明和2年(1765)8月	28.7×19.7	C7-182
34	備前備中国境争論裁許絵図	1 鋪	宝暦8年(1758)6月	177.0×215.0	岡山市教育委員会

池田家文庫絵図展・記念講演会開催記録

池田家文庫絵図展

年度	展示テーマ	会期
平 9	絵図にみる岡山城	1997年10月24日～11月2日
平 10	岡山藩と海の道	1998年10月23日～11月1日
平 11	後楽園と岡山藩	1999年10月23日～11月1日
平 12	備前慶長国絵図のふしぎ	2000年10月23日～11月1日
平 13	岡山藩江戸藩邸ものがたり	2001年10月23日～11月1日
平 14	開けゆく岡山平野 岡山藩の新田開発（1）	2002年10月23日～11月1日
平 15	新田開発をめぐる争い 岡山藩の新田開発（2）	2003年10月23日～11月1日
平 16	岡山城下町をあるく	2004年10月23日～11月1日
平 17	江戸時代の岡山 池田家文庫絵図名品展	2005年9月29日～10月10日
平 18	戦さと城	2006年10月26日～11月12日
平 19	陸の道	2007年11月16日～12月2日
平 20	日本と「異国」	2008年11月1日～11月16日
平 21	岡山藩の教育	2009年9月29日～10月18日
平 22	絵図にみる中国四国地方の城下町	2010年11月16日～11月28日
平 23	江戸時代の巨大手描き絵図 国絵図復元！	2011年10月22日～11月6日

記念講演会・パネルディスカッション

開催年度	記念講演会	記念講演会講師（役職は当時）	期日
平 9	絵図を読む	岡山大学文学部 教授 倉地克直	1997年10月25日
平 10	瀬戸内の交流	岡山県総合文化センター 総括学芸員 竹林榮一	1998年10月23日
平 11	日本庭園と後楽園	岡山大学農学部 教授 千葉喬三	1999年10月23日
平 12	江戸幕府の国絵図事業	東 亜 大 学 教授 川村博忠	2000年10月28日
平 13	岡山藩の江戸藩邸	東京大学史料編纂所 教授 宮崎勝美	2001年10月23日
平 14	津田永忠と岡山藩の土木事業	岡山大学環境理工学部 教授 名合宏之	2002年10月26日
平 15	近世の境界論争と裁判	東京大学史料編纂所 助教授 杉本史子	2003年10月23日
平 16	岡山城下町を掘る ～絵図と遺構～	岡山市デジタルミュージアム 開設事務所 乗岡 実	2004年10月23日
平 17	池田家文庫絵図の見方	岡山大学文学部 教授 倉地克直	2005年10月 1日
平 18	「長久手合戦図屏風」の世界	茨城大学人文学部 教授 高橋 修	2006年10月26日
平 19	江戸時代の陸上交通	岡山県立記録資料館 館長 在間宣久	2007年11月23日
平 20	「鎖国」の中の日本と朝鮮	名古屋大学文学部 教授 池内 敏	2008年11月 1日
平 21	儒教教育と駁の人間形成	京都大学教育学研究科 教授 辻本雅史	2009年10月 3日
平 22	デジタルマップで廻る城下町	徳島大学大学院ノシオ・アーツ・サイエンス研究部 教授 平井松午	2010年11月20日
平 23	国絵図復元の成果	東京芸術大学大学院 准教授 荒井 経	2011年10月23日

開催年度	パネルディスカッション	パネラー・司会	期日
平 23	国絵図復活	東京大学史料編纂所 教授 杉本史子 東京芸術大学大学院 准教授 荒井経 電気通信大学 准教授 佐藤賢一 筑波大学大学院 博士前期課程 中村裕美子 国絵図研究会 会員 青木充子 [司会] 東京大学大学院 准教授 中村雄祐	2011年10月23日

平成 16 年度までは「池田家文庫等貴重資料展」、平成 17 年度から「池田家文庫絵図展」

平成 9 年度～平成 16 年度は岡山大学附属図書館、平成 17 年度からは岡山市デジタルミュージアムで開催

謝辞

本展の開催にあたり、下記の機関・関係者各位に多大なご協力を賜りました。ここに記し、感謝の意を表します。(敬称略、順不同)

早島町教育委員会

岡山市教育委員会

平成 23 年度池田家文庫絵図展
「江戸時代の巨大手描き絵図 - 国絵図復元！」

発行日 : 2011 年 10 月 22 日
主 催 : 岡山大学附属図書館 岡山市デジタルミュージアム
発 行 : 岡山大学附属図書館
〒 700-8530 岡山市北区津島中 3-1-1
TEL(086)-251-7322
印 刷 : 株式会社中野コロタイプ

